事業完了報告書 （実行団体）

事業名:	”孤育て”防止対策地域資源有効活用事業
資金分配団体名:	認定NPO法人北海道NPOファンド
実行団体名:	特定非営利活動法人こどもサポートふらの
実施時期:	2021年3月～2022年2月
事業対象地域:	北海道
事業対象者:	富良野管内の親子

Version 3.2

日付： 2022年3月xx日

Ⅰ．事業概要

事業実施概要	居場所や相談先がなく、孤育て状態となっている親子のストレス緩和のために、孤立を防ぎ、繋がれる「場」を地域の人材と協力しあい、 民間として継続提供を行う。具体的には、①当法人のファミサポアドバイザー等個人宅の庭を開放（毎回1-2組ずつ親子や不登校の子どもに場所を開放し、 母親の話し相手や、子どもの遊び相手になって、親と子ども双方にとってのストレス解消をはかる）　②公的な子育て支援センターがコロナ対策で利用制限等が かかり機能してないため、代替案として「ミニ交流会」を定期的に開催し、参加親子同士の繋がりや関係作りをサポートしたり、 講師を招き子育て関連の勉強会や講習を行う。

Ⅱ．課題・事業設計の振返り

課題設定、事業設計に関する振り返り	ニーズについては新型コロナの影響の長期化、2度の緊急事態宣言に伴い、想定以上となった。①少人数スタイルのお家パークの開催頻度は当初設定数(月に6回程度/年72回)に対し、約1.5倍（106回）の開催となり、特に緊急事態宣言下においては　その需要が明確にみえ、事業開始後から出来る限り受入れを行なう対応をした。結果、当初予定数以上の受け入れは実現できた。 一方で、②ミニ交流会においても　各回4－5組募集、月に2－3回の設定であったが、すぐに定員に達することもあり、利用施設（ふらりえ）の開放日を設けた。別途対応することで、ニーズを取りこぼさず、利用希望者のフォローを臨機応援に行えたことでも、信頼関係が築け、リピーターや繋がりが広がり　継続的な利用につながった。 両取組ともに、まさにコロナ禍での孤立・孤育てを防ぐ対応ができ、緊急事態宣言下においても、臨機応変に地域の状況や　利用者の気持ちに寄り添い、求められる活動を行えた。行政や地域の子育て団体とも意見交換や連携することで今後（次年度以降）の活動も広がり、継続が見込めることになったことで、本事業は社会に必要な取り組みであるという再認識を行えた。 なお、令和3（2021）年2月末の時点では当法人の利用会員数165名に対し、本事業後の令和4年2月末では194名と　29名の増員（約1.2倍）になったことからも、地域により密着した関係が築けていると思われる。

Ⅲ．今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）※複数設定の場合はコピーし複数記載ください。

①受益者	②課題	③今回の事業実施で達成される状態（アウトプット）	④指標	⑤目標値・目標状態	⑥結果	⑦考察
子ども・学生	居場所の不足	活動を通じ、子育て世代の孤立を防ぎ、事業以外の場での交流が主体的に行われる	参加者数（親子組数、親・子それぞれの人数）、相談件数、事後アンケートによる満足度調査	①おうちパーク　72組ほど（週1-2回×4週×12か月） ②ミニ交流会　150組ほど（月2-3回×12か月） アンケート回収　または相談内容のフォローアップのための事後ヒアリング調査　を100％目標	①おうちパーク 106回開催 74組（子ども118・大人77名） ②ミニ交流会 33回開催 221組（子ども253名、大人217名） ※人数には緊急事態宣言下の個別対応含む アンケート回収またはヒアリングはほぼ100％達成	・ニーズに一致していた活動であっただけではなく、スタッフが丁寧に利用希望者に声掛けしたり、関わることで、参加しやすい環境作りを行えた。 ・アンケートやヒアリングのなかでも要望を伺い、更に細かいニーズを拾え、次の開催に活かせた　の2点により、より多くの成果が望めたように思う。

Ⅳ．アウトカム（事業実施以降に目標とする状況）*

事業実施以降に目標とする状況	活動を通じ、子育て世代の孤立を防ぎ、当法人のアドバイザーを通さずとも、参加者同士が子育ての相談や話ができる関係となり、子供が成長しても、互いに支えあえること、また、学校に行くことのできない子どもたちが安心していられる居場所を作ることを目標とする。
考察等	実際に事業での活動を通じ、参加者同士が関係性を築きつつある。お互いの連絡先を交換したり、往来があったりと日常的に関わり・支えあっている様子が見られる。　居場所としての拠点施設は利用者支援事業として、取り組むことが出来るよう次年度以降の使用も自治体と協議中である。3月からの事業展開後、SNS、スタッフの声掛け、チラシ、口コミ等の案内で徐々に周知ができた。①お家パークでは、個人宅を開放かつ、担当アドバイザーが親身になり対応する様子から、徐々に定着し、想定よりも多い回数が必要とされた。②ミニ交流会ではリピーターの利用だけでなく、初めての利用の方も巻き込み、つながりを展開する場を提供。両事業ともに、コロナ対策として始めたが、その前よりも、個別対応やアウトリーチのニーズや重要性があったのだなと、はっきりとした手ごたえとして見えてきたため、両事業の必要性を改めて感じている。

Ⅴ．活動

活動	進捗	概要
お家パーク	計画通り	毎回1-2組の親子、及び学童期の子どもを対象に、当法人アドバイザーや地域住民の個人宅の庭を開放し、親の話し相手や子どもの遊び相手になることで孤立状態からの解放。 ※緊急事態宣言、蔓延防止措置下ではまさに行き場を求めて、利用希望の声が増え、対応した。
ミニ交流会	計画通り	各回5組ほどの乳幼児連れ親子を募り、同世代の子供を持つ親同士がつながる場作り。交流会では、子供の年齢に合わせた簡単な運動や、手遊びなどを取り入れ、子供とのかかわり方を親も学ぶ場を提供をしていき、子供も体を動かすことで、心身の発達を促す。※緊急事態宣言や蔓延防止措置下では、個別対応を臨機応変に行った。

Ⅵ．想定外のアウトカム、活動、波及効果など

想定外のアウトカム、活動、波及効果など	コロナ感染症が懸念ではあったが、検温・手洗い・消毒などの対策を徹底したり、緊急事態宣言下での活動方法も適宜対応を検討して継続したため、リスクを心配する声は見受けられなかった。事業開催中の、事故やケガも幸い発生していない。 この夏は北海道らしからぬ真夏日が続き、暑さ対策や天候による開催の難しさの課題も見えた。水の事故・熱中症に気を付けながらの活動をしたり、厳冬期は、開催場所も臨機応援に調整し、公共施設など利用させてもらうことで、行政にも活動を伝えやすくなったり、一般の公園を利用することで地域の方の目にも触れ、利用者以外にも活動の周知を行えた。 リスタート事業をきっかけとして、女性のためのつながりサポート事業（地域女性活躍推進交付金）を受託し、リスタート事業の2活動では補えなかったニーズに対応することができた。（リスタート事業を実施することで見えてきたニーズに対して、積極的に資金調達して並行して取り組むことなった）

Ⅶ．事業終了時の課題を取り巻く環境や対象者の変化と次の活動

課題を取り巻く変化	新型コロナウイルス感染拡大防止対策により、自治体が運営する公的な子育て支援センターや、子育て世帯の居場所が閉じられたり、規模を縮小させる中、子育て中の親子が行き場を失ってしまう状況から、本事業の必要性を感じ、開始したが、一年前同様　コロナの緊急事態宣言や蔓延防止対策期間になると　やはり公的な施設は閉鎖したり、受入規模を縮小する姿勢は変わらぬままである。そういった時にこそ居場所を提供したいという思いから、当法人における「お家パーク」「ミニ交流会」は、地域の状況を考慮し、利用者の声を聞きながら、、、 （コロナ対策に社会が慣れてきたこともあり、過剰に心配を抱く反応ではなく、その状況下でも…） 本来子育てに必要な人との関わりが途絶えてしまわざるを得ず、孤独感を感じる母親が急増。また、一日の大部分を室内で過ごすことで、子どもたちの問題行動が増加、その対応に苦慮する母親からの相談も増えた。緊急事態宣言が発動された当時、当法人のファミリー・サポート・センター会員への状況を電話等で聞き取った際も、涙を流しながら孤立と子育ての負担感を口にする母親がとても多かった。特に中富良野町においては、コロナ感染者が町内から出たこともあり、学校やこども園、子育て支援センターなどが他地域より早期に休校、休園したため、子どもたちの日常の暮らしの場が著しく奪われ、親も仕事を休まざるを得ない状況が長引き、親子ともに、ストレスを抱える期間が長かったことや、自分たちが感染してしまう、させてしまうのではないか、という不安もストレスを過剰に受ける状態であったと相談者の話から強く感じた。そのため、当法人のファミサポアドバイザー個人宅の庭を開放し、毎回1，2組ずつ親子を招いて、当法人に登録をしているサポーター会員の協力も得ながら、母親の話し相手になったり、また、子育て支援センターには連れていけない学童など年齢の幅が広い兄姉などの子ども達も受け入れ、遊び相手になって、親子双方にとってのストレス解消を促した経緯を受け、今後もコロナ禍における子育ての孤立化を改善すべく、継続的に、地域の人材資源を最大限活用し、臨機応変、かつ柔軟に対応できる民間の力によって、親や幅広く子どもへの居場所提供を行っていくことが必要と考える。

Ⅷ. 他団体との連携

連携先	実施内容・結果
上富良野町（行政）	個別対応が必要なお子さんの対応としてパークを利用。職員が見学にも来て、お子さんの発達や関わりの情報共有ができた。
中富良野町（行政）	乳児検診会場に当スタッフが出かけ、活動の説明や顔のみえる繋がり作りのきっかけを始めることができた。
子育て支援センター（中富良野）	毎月行われる支援センター会議に呼んで頂けるようになり、お互いの情報交換をできるようになった。
森のようちえん「森のたね」	ミニ交流会（2022年2月）での外遊び・交流会の指導と場所提供をしていただき、今後も継続的に連携をできる可能性をもてた。
放課後等デイサービスゆうひ	お家パークの見学・利用を行ってもらい、発達障がい児や不登校児の居場所としての可能性を今後検討の余地ありと感じることができた。

Ⅸ．インプット　※事業完了月の月次収支管理簿の金額を入力ください。（精算金額と一致させる必要はありません）

		計画額	実績額	執行率
事業費	**直接事業費**	4,212,062	3,910,523	92.8%
	管理的経費	417,830	304,880	73.0%
合計		4,629,892	4,215,403	91.0%

補足説明	2022年2月末の実績数値です（3月最終精算）

Ⅹ. 広報実績

広報内容	内容
1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）	北海道新聞（富良野版）に3回掲載（4/17、4/24，5/11）
2.広報制作物等　当該事業費を使って製作したもの	案内チラシ　ふらりえ通信5月　ラクスル　2500部印刷　7,631円 案内チラシ　ふらりえ通信10月　ラクスル　2500部印刷　7,869円 案内チラシ　ふらりえ通信2月　ラクスル　2200部印刷　8,369円 年間報告書冊子　ラクスル500部印刷　17507円
3.広報制作物、購入物等でシンボルマークの活用方法（事例）	上記チラシの作成時に挿入 拠点（ふらりえ）への掲示
4.報告書等	レポート（お家パーク、ミニ交流会）添付参照 年間レポート冊子

XI. ガバナンス・コンプライアンス実績

①規程類※の整備実績 ※規程類：定款・規程及び準ずる文書類(指針・ガイドライン等を含む)	状況	内容
1.事業期間に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。	整備中	
2.上記設問1で「整備中」の場合は、事業開始時と比較して、整備状況がどのように改善されたかを記載してください。		
3.整備が完了した規程類を自団体のwebサイト上で広く一般公開していますか。	未公開	
4.変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。	変更はなかった	
②ガバナンス・コンプライアンス体制	**状況**	**内容**
1. 社員総会、評議員会、理事会は、規程類の定める通りに開催されていますか。	はい	
2. 利益相反防止のための自己申告を定期的に行っていますか。	はい	
3.関連する規程類や資金提供契約の定めどおり情報公開を行っていますか。	いいえ	
4.コンプライアンス委員会またはコンプライアンス責任者を設置していましたか。	いいえ	
5.ガバナンス・コンプライアンスの整備や強化施策を検討・実施しましたか。	いいえ	
6.報告年度の会計監査はどのように実施しましたか。 （実施予定の場合含む）（複数選択可）	☐ 外部監査 ☑ 内部監査 ☐ 実施予定はない	
7.本事業に対して、国や地方公共団体からの補助金・助成金等を申請、または受領していますか。	いいえ	
8.内部通報制度は整備されていますか。	いいえ	